

不登校への類似性認知と行動(2)

○宮本正一

(岐阜大学)

キーワード: 不登校 類似性 適応指導教室

Effects of the similarity to non-attendant persons on the empathy

Masakazu Miyamoto

(Gifu University)

Key words: non-attendance, similarity

目的

不登校への対応を考えるとき、本人自身は不登校に対してどのような意識を持っているのであろうか。本研究はビデオに登場する不登校者に対して適応指導教室に通っている者がどのような類似性認知をするかを実験的に検証する。

方法

研究対象者 岐阜県内のA中学校2・3年生の生徒、計8学級の245名とその校区の適応指導教室の生徒7名、合わせて252名。

ビデオ 登場人物の異なる、視聴時間約3分のビデオを2種類使用した。ビデオ1は優等生だった男子(現在22歳)が部活動の野球でつまずいて不登校になっていった様子をナレーションと本人が語っていく内容である。ビデオ2はいじめが原因で身体反応が現れ、不登校になっていった男子(現在20歳)の様子をナレーションと本人が語っていく内容である。

類似性認知尺度 「性格」「雰囲気」「考え方」「印象」「なんとなく」の5項目に対して「似ている、どちらかといえば似ている、どちらかといえば似ていない、似ていない」の4件法で回答を求めた。

イメージ 白井(1992)で使用された登校拒否児に対するイメージ尺度から形容詞を一部利用し、ビデオに登場した不登校の人に対するイメージについて、SD方式により測定した。回答形式は意味が対になる形容詞からなる15対に対して、「非常によくあてはまる、よくあてはまる、どちらかといえばあてはまる」の3項目を対にした6件法で回答を求めた。ポジティブな形容詞(例:明るい)に「非常によくあてはまる」としたものを6点、ネガティブな形容詞(例:暗い)に「非常によくあてはまる」としたものを1点とする尺度得点とした。この尺度得点は点数が高いほどビデオに登場した不登校の人に対して好意的であるといえるので、好意度得点と名付けることとする。

手続き 中学校2・3年生の学級担任の先生を中心に協力を願い、各学級で調査用紙を配り、放送室から放送で注意事項などを読み上げた。そしてビデオを再生したのち生徒一人ひとりに回答してもらった。調査終了後に質問紙は学級ごとにまとめて回収してもらった。適応指導教室では、個々の生徒に質問紙を配付し、注意事項を読み上げたのち、ビデオを再生した。その後回答を求めた。どちらの調査も実施時間はおよそ20分であった。

結果と考察

類似性認知尺度は、似ている(4)、どちらかといえば似ている(3)、どちらかといえば似ていない(2)、似ていない(1)と得点化し、5項目の合計を求める。

イメージ尺度はビデオ毎に因子分析を行い、どちらも1因子解が得られた。ビデオ1は11項目、ビデオ2は14項目の

平均項目得点を登場人物への「好意度得点」と呼ぶ。

好意度得点と類似度得点に関して、ビデオ1と2との違い(A要因)、中2、中3、適応指導教室通級群の3群(B要因)で二要因分散分析を行った。

図1に、類似性認知得点の平均を示した。適応指導教室通級群(n=7)は中2、中3の2群よりも明らかに自分との類似性を認知していた(F[2/249]=12.82, p<.01)。質問に正直に回答していたと判断される。LSD法による下位検定でも有意であった。

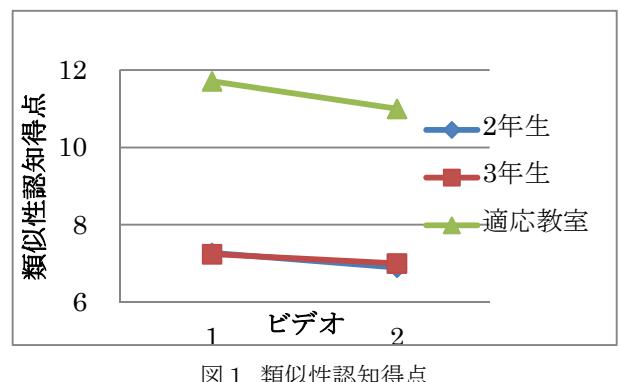


図1 類似性認知得点

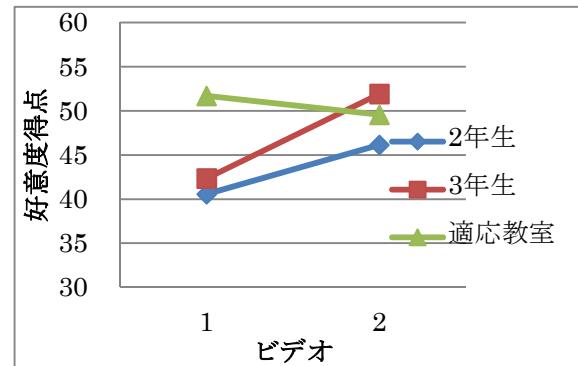


図2 好意度得点

図2に好意度得点の平均を示した。ビデオと群の交互作用が有意(F[2/249]=3.63, p<.05)となった。そこで各要因の単純主効果を分析した結果、ビデオ1の場合のみLSD法による多重比較の結果、適応指導教室通級群(n=7)は中2、中3の2群よりも明らかにビデオの登場人物に対して好意を抱いていた(Mse=79.81, p<.05)。2つのビデオの登場人物に対して好意的感覚を示した。通常の中2、中3はビデオ1の登場人物に対して好意的感覚を示していない。その背景をさらに再検討する必要がある。